

# 海鳥センター**鳥**の勉強会



2013年12月11日 19:30-21:00

北海道海鳥センター

主催：北海道海鳥センター友の会

# はじめに

3名の鳥の専門家が羽幌に来る機会がありましたので、時間をいただいて海鳥センターで勉強会をすることになりました。

羽幌には冬になると北からオオワシやオジロワシが渡ってきます。最近羽幌や苫前で風車の事故が相次いでいますが、海岸沿いで餌を探しているワシ達も風車で事故に遭っています。1 題目としてワシの冬の行動と風車事故(バードストライク)との関係話を話してもらいます。

羽幌には多くのスズメが住んでおり、私たちにとって身近な存在ですが、その生態は意外と知られていません。2 題目としてスズメの住処としての人間の家などの話を話してもらいます。

羽幌のそばにある天売島にはたくさんの海鳥が繁殖しています。太平洋側の苫小牧では海鳥こそ繁殖していませんが、沖合いに行くと羽幌では見ることができないアホウドリの仲間などの海鳥を見ることができます。3 題目としてクルーザーから観察した海鳥の話を話してもらいます。



スズメのヒナ

# プログラム

19:30-19:35 開会 挨拶

19:35-20:00 海ワシ類の越冬期の行動とバードストライク  
植田睦之 (バードリサーチ)

20:00-20:25 住宅地におけるスズメの住宅  
三上かつら (バードリサーチ)

20:25-20:50 胆振沖の海鳥  
南波興之 (北海道大学低温科学研究所)

-21:00 閉会



コアホウドリ (先崎理之 撮影)

# 発表要旨

## 海ワシ類の越冬期の行動とバードストライク

植田陸之（バードリサーチ）

現在、再生可能エネルギーの導入が進められています。そのなかで太陽光発電とならんで風力発電が重要なエネルギー源として導入されています。こうした重要性の反面、風力発電施設ではバードストライクの問題がおきていて、特にオジロワシの衝突事故が問題となっています。

この事故を減らすことを目指し、私たちは環境省の事業として、ワシの行動の観察、事故事例の解析を行ってきました。

風車への衝突事故はオジロワシでは起きていますが、オオワシはオジロワシと同様の生態的特性を持っているにもかかわらず、わずかしおきていません。そこで、オジロワシとオオワシの行動等の違いから、風車衝突の原因について考えてみました。

個体の時間あたりの飛行頻度を比較すると、オジロワシの方が頻繁にそして広い範囲飛ぶことがわかりました。また、飛翔高度もオジロワシの方が低く、バードストライクの危険性の高い高度を飛ぶ頻度が高いことがわかりました。オジロワシは飛びながら食物を探す傾向があり、オオワシはとまって食物を待つ傾向があります。それが、このような違いにつながり、事故の差につながっている可能性があります。

また、地形別の飛行頻度を見ると海岸線を飛ぶことが多く、事故事例の解析からも海岸に近いほど事故発生頻度が高いことがわかりました。このことは、風車の設置場所を海岸から少し内陸にするだけで、事故のリスクを下げることができることを示しています。

こうしたことはわかってきましたが、依然事故が起こるメカニズムははっきりしていません。調査は現在も続いており、衝突がおきる原因を究明したり、衝突感知システムをつくったり、また、風車の視認性を高めることで衝突リスクを下げることができるのかなどについて検討していく予定です。

# 住宅地におけるスズメの住宅 三上かつら（バードリサーチ）

先進国では人口の7割以上が都市に住んでいる。近年、都市においては、人々の生活にうるおいをもたらすような新しい要素が求められている。そのような現状で、人工的な環境をほかの生き物がどのように利用しているのかを知ることは重要である。

スズメは人の生活圏に最も近いところに住む鳥といえる。日本人なら誰でも知っている鳥で、昔は稲を食べる害鳥でもあり、稲作農家にとっては憎らしい存在であった。一方で、近年の都市公園では、スズメをはじめとする鳥類に餌を与える人が増え、“手乗りスズメ”のような現象も起きている。これは人々が都市の生活のなかに生き物とのふれあいを求めるようになった時代の変化を象徴しているといえる。

そのようなスズメだが、かつては人の家に巣をつくり、どこにでもいる存在だった。ところが、最近（おもに平成になったころから）新しく造られた住宅地に行くと、スズメが非常に少ないように感じる。住宅事情に起こっている変化が、スズメの生息数にも徐々に影響を与えているのかもしれない。

そこで、スズメが住宅地をどのように利用しているのか、ということについて、1年を通じて、岩手県内のある住宅地で定量調査を行った。

繁殖期の調査では、2000年代に造られた新しい住宅地と、1990年代に造られた少し古い住宅地、1970年代には存在していたやや古い住宅地の3か所で、スズメの営巣場所の分布や、実際に巣があった構造物を調べた。結果、新しい住宅地ではスズメの密度が低く、スズメが営巣している構造物などにも違いがみられた。

非繁殖期の調査として、前述した少し古い住宅地において、秋、冬、次の春までの間、朝のスズメの行動や場所を定期的に調査した。調査地は、12～2月の間は積雪するが、雪のある季節には群れサイズが大きくなり、住宅地内の草地（未分譲地）や植栽の根本にある地面が露出した場所にいることが多かった。晩秋には前営巣地に近い場所、早春には新しい営巣地に近い場所で、1～3羽で執着している様子が多くみられた。これは可能な限りなわばりに近いところから離れまいとしている行動だと解釈できる。冬が厳しい地方では、餌を探すのが大変ではあるが、繁殖期の調査結果からもスズメは住宅難であり、冬をこらえてなわばりを維持するだけの価値はあるのかもしれない。

# 胆振沖の海鳥

## 南波興之（北海道大学低温科学研究所）

胆振地方は、太平洋に面した地方で、通年を通して多くの海鳥類を観察できることが知られている。しかしながら、海鳥を間近で観察する機会は少なかったため、発表者は、苫小牧市の勇払マリーナでクルーザーをチャーターした海鳥ウォッチングクルーズの活動を始め、2009年9月から2013年11月までで合計32回観察活動を行った。クルーシングの行動範囲は、約30kmの範囲で最大水深は約250mの範囲をマリーナから約4時間（場合により3時間から6時間）で任意のコースで船を進め必要に応じて停船し、鳥類などを観察した。

胆振沖の海底は、水深100～200mまではなだらかな大陸棚になっており、それ以深は急に深くなる大陸棚斜面となっている。そのため、水深100m未満の範囲では、アビ類やウミスズメ類などの沿岸性の海鳥が見られ、それ以降の水深の場所ではミスナギドリ類やアホウドリ類など沖合性の海鳥を観察することができる。

現在までで合計109種の鳥類（うち海鳥47種）を観察しており（アビ類4種、アジサシ類2種、カイツブリ類3種、ウミスズメ類12種、アホウドリ類3種、ミスナギドリ類6種、ウミツバメ類1種、ウ類3種、海水カモ類7種、トウゾクカモメ類4種、ヒレアシシギ類2種）、もっとも多くの鳥類が観察できるのは、初夏と秋季の渡りの季節であった。また、5月末には日本での生態がほとんどわかっていないマダラウミスズメのペアと思われる群が複数観察されており、太平洋沿岸で繁殖している可能性が示唆されており、今後の生息・繁殖調査の必要性がある。

**海鳥センター鳥の勉強会**

2013年12月11日発行

編集・発行

**北海道海鳥センター友の会**

北海道苫前郡羽幌町北6条1丁目

北海道海鳥センター内

0164-69-2080